

公認会計士「研修出向制度」 体験者レポート

vol. 16 取材・文／南山武志 撮影／笹木 淳

新日本有限責任監査法人が2010年にスタートさせた、一般事業会社への会計士「研修出向制度」。
本制度を活用し、自己成長に励む公認会計士たちのリアル・レポートをお届けする。



「税を知りたい」と
出向を決意

——大学を出てから監査法人に入るまで、かなり時間がありますね。

廣瀬 実は会計士試験の勉強を一度やめて、非上場の会社の経理をやっていました。でもやはり資格を取りたいと思い、再チャレンジしました。実際にやってみると、監査の仕事をとて面白く感じました。会社の経理にいてもアクセスできない情報に触れることができるし、ロジックを組み立てて一つひとつ立証していくという仕事は水が合いました。3年目の終わり頃から主査を務めさせていただき、自分がミスしたら大変なことになるんだ、という責任感も含め、大きなやりがいを感じて働いてました。

——それなのに出向に手を挙げたのは、なぜですか？

廣瀬 ちよつと話が長くなるんですけど（笑）。主査で担当していた企業が、ある時、米国の企業を買収しました。その際、会計士の習いでノレンの金額とか見積もり税効果だとかにまず頭がいつて、そうした切り口をメインに、経理の方と話をしていたのです。ところが、企業が最優先に考えていたのはキャッシュアウトがどれくらいになるのか、ということ。経理が気になるのは、税務的な問題でした。でも、米国

人時代の担当企業が、ちょうどその文書化を始めていたんですね。それで税務部門の方と仕事もし、社内の研修なども参加させてもらっていたので、知識がゼロというわけではありませんでした。そういう点も、とてもラッキーだったと思っています。

監査との違いを痛感。
それも経験に

——かつて働いた会社と違って、今度は上場大企業。出向してどうでしたか？

廣瀬 まず驚いたのが、消費税についての考え方でした。監査では、利益インパクトのない消費税のことは、正直あまり気にしません。ところが事業会社にいると、いくらになるのか、どれだけセーブできるのかは大問題なのです。やはりキャッシュアウトが重要だと感じました。もう一つなるほどと感じたのは、会社の設立です。新たな会社をつくるということは、大小にかかわらずその企業にとって、必ず何らかの目的があるわけです。設立のためにすぐ多くの人が時間をかけているのを間近で見て、会社のニーズと監査の立場の違いというか、開きを実感させられました。

——違いは、どこから生じるのでしょうか？

廣瀬 当たり前のことなんですけど、



会社はまず経営があつて、会計はあくまでもそれに付随する部署であり、機能なのです。ところが監査となると、会計を語るのが仕事とばかりにそちらが前面に出て、時には経営を無視するような発言をしてしまうこともあります。言わなければならない局面もあるとは思いますが、とにかくその意識の差は想像以上に大きいことが、よくわかりました。

——社内では、事業の現場の方と、よく話をされるのですか？

廣瀬 時節柄、消費税に関する質問をよく受けます。一度社内でも消費税改正についての説明会をやったのですが、それがきっかけで、いろんな事業部に知り合いが増えました。いただいた質問は口頭での返答にとどめるのではなく、きちんと文書にして、できるだけ

この貴重な経験を生かし、
すべての要望に応えられる、
本物の専門家になりたい

株式会社GSユアサ理財部
株式会社ジーエスユアサアカウンティングサービス税務グループ

廣瀬文子 ● 35歳

の税務のことを聞かれてもチンプンカンプン。ある意味、担当企業に育ててもらっているのに、いざという時お役に立てないというのは、ショックでもあり、屈辱も感じました。そして、法人内のローテーションでその企業の担当を離れることになったのを機に、今後のためにちよつと別の経験をしてみたいチャンスかなと思い、いろいろな道を探し始めていたのです。ちよう

理路整然とお伝えするように心がけています。

——今後の目標を聞かせてください。

廣瀬 繰り返しになりますが、会計まわりの質問に答えられなかったら、専門家とはいえません。「わからないから」で諦めていたら、会計士の看板は外すしかないと思っています。本当に頼れる存在になるために、もっと勉強もして経験も積みたいですね。逆に監査法人でいろんな会社を見ってきましたから、そうした経験を当社にフィードバックしていけたらいいな、と思います。

——特に若い会計士の方に、メッセージをお願いします。

廣瀬 監査法人にいても、いろんな経験を積むことはできます。ただ私は、もっと知識の吸収や新たな経験に貪欲でありたいと感じて、出向の道を選び



株式会社GSユアサ
取締役 理財部長
中川敏幸

出向受け入れ企業の声
一流の能力を持った異分子として、
社内に刺激を与え続けてほしい

この研修出向制度で2011年から毎年1人ずつ会計士に来てもらい、廣瀬さんで3人目。現場でそのスキルを発揮して経理業務の改善に直接力を発揮してもらいたいというのはもちろん、それだけではなく若手が増えた職場で本当のプロの仕事を見せてほしい、という狙いがあった。経理は単に数字をまとめて終わりではなく、それをどう生かすかというステップこそ重要である。そのためには、メンバー一人ひとりが“一流”の経理パーソンでないと困る。そのお手本として彼らは最適だったのだが、目論見は当たり、周囲は大いに刺激を受けている。

廣瀬さんには、税務の仕事をお願いしたいという条件で来てもらった。ルーティンワークのほか、どの会社も頭を悩ます移転価格税制について取り組んでもらっている。入社8カ月ほどではあるが、非常に力になってくれており、頼もしいばかりだ。

Ayako Hirose Profile

1978年12月1日
2001年3月

2008年12月

2012年11月
2013年7月

家族構成＝独身

兵庫県太子町生まれ
大阪市立大学商学部
商学科卒業
公認会計士試験合格
新日本有限責任監査法人入所
公認会計士登録
株式会社
GSユアサグループへ出向

ました。迷っているくらいなら、3年限定と割り切って、この制度に手を挙げてみることをおすすめします。ただし、あまり早く外に出すぎても、意味がないかもしれません。少なくとも主査くらいの立場で仕事をし、監査とは何かを十分理解、体得してからのほうが成長の糧になるし、企業のお役にも立てるのではないのでしょうか。

どそのタイミングでこの制度を知り、応募することになりました。

——GSユアサグループでは、税務を担当なさっていますね。会計士にとっては「苦手」なところだと思いますが。

廣瀬 ただ、まさにそこを経験したいと思っていましたから、私にとっては「渡りに船」でした。今、移転価格税制に関するプロジェクトにもかかわっているのですが、先ほどお話しした法